令和六年度入学試験問題（前期日程）

国　語

中等教育教員養成課程　中等教育プログラム　国語専攻

注意事項

一　解答はすべて別紙解答紙の指定の箇所に記入すること。

二　解答紙には、必ず受験番号を記入すること。

令和６年度前期日程入学試験問題

問題訂正

中等教育教員養成課程　中等教育プログラム　国語専攻

◎科目名　　国語

14ページ　問七

（誤）ア　井手の地に泊まった「ある人」は、土地の様子や井出川の

（正）ア　井手の地に泊まった「ある人」は、土地の様子や井手川の

解答するにあたっては、次のことに注意せよ。

ア　送り仮名・仮名遣い・文字・記号の表記については、標準的慣用表記によること。

イ　句読点は一字に数える。

ウ　楷書で書くこと。

〔一〕次のそれぞれの問いに答えよ。

問一　①～⑩のカタカナの部分は漢字で、漢字の部分は読みをひらがなで記せ。

①　ジョウキを逸する　②　真相をカッパする　③　悪事をテキハツする　④　細部にコウデイする

⑤　外交セッショウを行う　⑥　夢をアキラめない　⑦　大願をジョウジュする　⑧　不当に虐げられる

⑨　試合の大勢が決まる　⑩　古書を渉猟する

問二　言葉の使い方として最も適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選び、記号で答えよ。

①　私には役不足で務まりません。　②　この件はどうぞご失念ください。

③　気が置けない相手なので緊張する。　④　彼は押しも押されもせぬ実力者だ。

⑤　優勝するのは火を見るより明らかだ。

問三　①～③の空欄に入る語として最も適当なものを、次の選択肢から一つ選び、記号で答えよ。

①　悲□慷慨（こう）　　②　古□蒼然（そう）　　③　意気□昂（こう）

ア　痛　　イ　憤　　ウ　色　　エ　激　　オ　物　　カ　軒

問四　①～③の意味として最も適当なものを、次の選択肢から一つ選び、記号で答えよ。

①　明鏡止水　　②　韋（い）編三絶　　③　捲（けん）土重来

ア　何度も繰り返して熱心に本を読むこと
イ　危険や困難から逃れることができないこと
ウ　海や川などの自然の景色が美しいさま
エ　澄み切って落ち着いた心のさま
オ　一度敗れたものが、再び勢いを盛り返すこと
カ　これまでに例がなく、非常に珍しいさま

問五　次の和歌は『新古今和歌集』に入集しているものである。これを読んで、以下の①②の問いに答えよ。

卯の花の　垣根ならねど　郭公（ほとぎす）　（　）の桂（かつら）の　かげに鳴くなり　　前中納言匡房（さきのちゅうなごんまさふさ）

①　この和歌で詠（よ）まれている季節を答えよ。

②　歌の中の（　）に入る語は次のどれか、最も適切なものを選択肢から一つ選び、記号で答えよ。

ア　星　　イ　月　　ウ　雲　　エ　空　　オ　闇

問六　次の漢文の傍線部①②を波線部①②の書き下し文のように読むために、必要となる返り点の組み合わせとして、最も適切なものを選択肢から一つ選び、記号で答えよ。

①　過而不改、是謂過矣。　②　君子喩於義、小人喩於利。

（書き下し文）

①　あやまちてあらためず、これをあやまちといふ。　②　くんしはぎにさとり、せうじんはりにさとる。

ア　（二・一・二・一）　イ　（下・中・上）　ウ　（レ・レ）　エ　（レ・二・一レ）　オ　（二・一レ）

カ　（レ・レ・レ）

問七　次の①～⑤の各問いに答えよ。

①　次の中から、『源氏物語』成立以前に作られたものを選択肢から一つ選び、記号で答えよ。

ア　『宇治拾遺物語』　イ　『去来抄』　ウ　『平家物語』　エ　『伊勢物語』　オ　『風姿花伝』

②　次の中から、本居宣長によって書かれたものを選択肢から一つ選び、記号で答えよ。

ア　『野ざらし紀行』　イ　『南総里見八犬伝』　ウ　『おらが春』　エ　『花月草紙』　オ　『玉勝間』

③　『若菜集』の著者を選択肢から一つ選び、記号で答えよ。

ア　島崎藤村　イ　夏目漱石　ウ　芥川龍之介　エ　坂口安吾　オ　遠藤周作

④　杜甫の作品を次の選択肢から一つ選び、記号で答えよ。

ア　長恨歌　イ　春暁　ウ　静夜思　エ　春望　オ　桃花源記　カ　楓橋夜泊

⑤　諸子百家の中の儒家の著作を次の選択肢から一つ選び、記号で答えよ。

ア　『史記』　イ　『孟子』　ウ　『文選』　エ　『列子』　オ　『世説新語』　カ　『韓非子』

〔二〕 次の文章を読んで、あとの問いに答えよ。

西欧の探偵小説の翻訳を読み散らかしていた子供の頃、その指し示している当のものがわたしにとってあまり定かな現実感を帯びるに至らないので、これはどうやら自分の生きている日常とややかけ離れた物質的環境に属する言葉なのではあるまいかという漠然とした気持を抱いていた語彙の一つに、「足音」がある。「足音」が聞こえたとか聞こえないとか言うが、いったいどういうことなのかとわたしは訝(いぶか)しんでいたのである。

小説を読むという体験は、たとえそれが母国語で書かれた文章の流れを辿(たど)る場合であっても、実はそこで用いられている語彙のすべてを完全に理解したうえで読み進めるというわけのものではない。小説の物語に身を委ねること。それは、次々に継起しては自分の中を通り過ぎてゆく言葉の運動のただなかで、A自分には馴(なじ)染みのない土地、馴染みのない時代、馴染みのない文化、馴染みのない階級に属する事物や習俗や観念に出会い、それがいったいどういうものなのかどうももう一つぴんとは来ないけれど、ぴんとは来ないなりに、まあきっとこんなようなことなのだろうと当たりをつけながら読者として自分なりの想像世界を築き上げてゆくという体験にほかならない。「当たりをつける」とは、ここで、自身の実体験に基づく記憶や、他の書物から得た知識や、いろいろな聞き齧(かじ)りや雑学などに照らし合わせて類推することであり、そしてaなかんずく、その当の小説の内部で、その未知の言葉がどういう文脈において出現し、どういう用いられかたをしているのかを観察することで、何とはなしに理解してしまう、というよりむしろ理解したことにしてしまうという片のつけかたのことであって、これが出来ない人間には小説を楽しむ資格はないと言える。たとえそれがとりたてて事細かに描写されたり説明されたりしていなくても、その未知の事物や習俗や観念がどういう状況で出現し、隣接しあった単語や行文とどういう関係を取り結んでいるのか、登場人物たちがそれにどういう反応を示しているのかといったことを観察すれば、それがどんなものなのかはおおよそわかるのであり、その程度にわかりさえすれば十分なのである。おおよそわかるというのは、言い換えれば、B「実体的」にではなく「形式的」ないし「構造的」にわかるということだ。

I 一時代前のイギリスのミステリーを読んでいると、「執事」などというものが出て来て、そんなものはもちろん実物を見

たことは一度もないけれど、どういう階級の人々が生きている世界でどういう役割を果たしている存在なのかといったことはだいたい見当がつくので、小説世界を享楽するにはその程度のことでおおかた足りるのだ。英国もので言えば、「ハイ・ティー」とか「パブ」とか「ライス・プディング」とか「フィッシュ・アンド・チップス」とか「ガイ・フォークス・デイ」とか、「貴族」とその「館」とか、「マント」とか「四頭馬車」とか、戦後生まれの日本人の子供にとっては見たことも聞いたこともないものばかりなのだが、たとえその実体をリアリスティックに摑むことはできなくても、そうした言葉がその小説世界の中で「構造的」に意味している内容の大まかなところを理解しさえすれば、それで不自由はしないということなのだ。「リーフィング・ポイント」とは船のどの部位か、「ジビング」するとはどういう行為のことか、たとえ厳密にはわからなくてもわれわれは スティーヴンスン(注1)の海洋冒険小説を楽しめるのだし、そもそも人は、そうした未知の単語との遭遇に魅かれてそれを読むのだとさえ言ってもよい。その逆に、おおむねこんなことだろうと「見当をつけ」なければならない未知の言葉が一つもなく、よくよく見知った物事ばかりで進行する小説を読むつまらなさを考えてみればよい。大人が自分の頭の中にある「子供」の身の丈に合わせたつもりで猫撫で声で物語るいわゆる「児童文学」が、当の子供の読者にとっては退屈でどうにも読めないのは、このことのゆえである。「見当」はもちろん「見当」にすぎず正確な理解ではないから、読み進めるにつれて修正を余儀なくされるということがあり、まったくの「見当違い」だったことがわかって途方に暮れるということもあり、ぼんやりとしかわからなかったものが不意にくっきりした鮮明なイメージを結ぶということもあり、そうした誤解と啓示の絶えざる揺れ動き、迷うことと道を見出すこととの無数の繰り返しを通じて、小説の読者の想像世界は一瞬ごとに築かれては崩れ、また築き直され、生き物のように輪郭を変えつづけてゆくのであり、

II われわれは、小説の第一ページから最後のページまでの厚みを、C或る変容と運動の体験として生きることになる。物語に読み耽る子供が、世界を知り初める体験の一種のミニチュアのごときものをそこから受け取るのはこのようにしてなのだ。既知の言葉ばかりで出来ている読み物は、ただ読書を既存の自分自身にめぐりあわせるだけであり、そうした読書によってもたらされるものはb退嬰的な満足にすぎず真の悦びではない。二十四歳のとき初めてイギリスに行き、「パブ」で「フィッシュ・アンド・チップス」を頬張ったときの感動をわたしは今でもはっきり覚えている(もっともあれはそんなに旨いものではなかった)。

一見したところ、「足音」は単なる普通名詞であり、「パブ」や「フィッシュ・アンド・チップス」のような固有に地方的な文化習俗ではないように見える。古今東西、人間が歩いたり走ったりすれば「足音」が響くに決まっているとも言えるからである。

Ⅲ、「足音」が聞こえるとか聞こえないとか、「足音」が近づいて来るとか後をつけて来るといった翻訳小説の記述――古めかしい訳者だと「跫音」などという字を当てたりしているのだが――に対して、子供心に何かD或る微妙な違和感を感じていたという鮮明な記憶がわたしにはあるのだ。それがとりわけイギリスの探偵小説と結びついて思い出されるのは、正体不明の人物がただ「足音」として、気配としてのみ迫って来るといった場面がそうしたジャンルの作品に多かったからなのだろうか。そう言えば G(注2)・K・チェスタートンのブラウン神父ものの一篇にたしか「奇妙な足音」というのがあったはずだ。ホテルの廊下で、ゆったりした物腰でぶらぶら歩いてゆく裕福な青年の足取りと、盆を片手に前かがみになって忙しく歩を運ぶボーイの足取りとを一人で演じ分ける悪漢の話だったように覚えている。人々が革靴で闊歩する西洋ふうのホテルなどとはあまり縁のない日常を送っていた昭和三十年代の日本人の少年にとって、こうした記述が、「類推」を通じて「構造的」にしか理解できない事柄に属していたとしても無理はなかったと言うべきだろう。

なるほど、わたしの育った街は、細い路地を除けばもうすでにすっかりアスファルトで舗装されてはいたけれど、もとより商店や小さな町工場の多い界隈だったので、行き交っているのはサンダルや草履を突っかけてぺたぺた歩いている人々ばかりで、スーツに革靴で身を固めて通勤するサラリーマンがアスファルトの上に足音を響かせるということはあまりなかった。のみならず、西欧とは異なり、われわれは屋内では履物を脱ぐ習慣になっているという決定的な事実があるだろう。日本の家屋の場合でも人が歩くと木の床が軋むということはむろんあり、また畳という植物繊維の素材にしても、或る人間の立ち居振舞いをその部屋の同席者に或る独特ななまなましい感触とともに伝えてよこすといった特性を持っていることはいる。裸足でひたひたと歩き回っているだけであるにはせよ、人の歩行が濃密な気配となって伝播するという点で言うならば、日本の木造家屋は西欧ふうの石やコンクリートの建物以上だと思うのだが、しかしEそこでの「気配」とは、物理的に反響する「足音」の概念とはやはり根本的に異質なものなのではないだろうか。わたしが西洋の翻訳探偵小説の中で出会っていた「足音」の一語は、やはり人々が石畳の上を革靴で音高

く闊歩している生活環境に深く根ざした語彙、やはり或る地方性の刻印を帯びていて、西欧人が西欧の風土の中から発想し使用している語彙だったのではないだろうか。

（松浦寿輝『青天有月』（講談社文芸文庫、二〇一四・二）から引用した。設問の都合により本文の一部を改変している。）

（注1）スティーヴンスン…ロバート・ルイス・スティーヴンスン（一八五〇～一八九四）。イギリスの小説家、詩人。代表作に冒険小説『宝島』などがある。

（注2）G・K・チェスタートン…（一八七四～一九三六）。イギリスの小説家、批評家、詩人。ブラウン神父が遭遇した事件を解明するシリーズが探偵小説の古典として知られている。

問一　二重傍線部a「なかんずく」、b「退嬰的」の意味として最も適当なものを次の選択肢の中から一つ選び、記号で答えよ。

a　なかんずく

イ　とりわけ　　ロ　付け加えると　　ハ　もしかしたら　　ニ　できるならば

b　退嬰的

イ　品質の低下した　　ロ　知識が足りない　　ハ　周囲と調和しない　　ニ　新しいことに取り組もうとしない

問二　空欄Ⅰ～Ⅲに入る語として最も適当なものを次の選択肢の中からそれぞれ一つ選び、記号で答えよ。

イ　のみならず　　ロ　しかし　　ハ　たとえば　　ニ　どうやら　　ホ　かくして

問三　傍線部A「自分には馴染みのない土地、馴染みのない時代、馴染みのない文化、馴染みのない階級に属する事物や習俗や観念」とはどういうことを表しているか、本文中から二十三字で抜き出して答えよ。

問四　傍線部B「「実体的」にではなく「形式的」ないし「構造的」にわかる」について、以下の問いに答えよ。

①「実体的」について、それまで未知のものであった事物や習俗や観念を筆者自身が「実体的」に理解した経験が語られている一文の最初の五字を抜き出して答えよ。

②「構造的」について、未知の言葉を「構造的」に理解するとはどのようなことか。次の文の空欄に入る内容を本文中の表現を用いて三十字以内で答えよ。

未知の言葉が、小説中の［　　］という点に注意して理解するということ。

問五　傍線部C「或る変容と運動の体験として生きる」とはどういうことか、本文における「変容」と「運動」のそれぞれの意味を明らかにしつつ、一五〇字以内で具体的に説明せよ。

問六　傍線部D「或る微妙な違和感を感じていた」とあるが、子供の頃の筆者がそのように感じたのはなぜか、最も適当なものを次の選択肢の中から一つ選び、記号で答えよ。

イ　チェスタートンの「奇妙な足音」のように、「足音」をテーマとしてとりあげた翻訳小説が当時の日本には少なかったため、子供の頃の読書経験がなかったから。

ロ　子供の頃には、西洋ふうのホテルに行くような日常的な経験がなかったため、翻訳小説における「足音」の意味について気がつくことができなかったから。

ハ　「足音」は単なる普通名詞であり、「パブ」や「フィッシュ・アンド・チップス」のような文化習俗に基づく未知の言葉とは異なると判断したから。

ニ　翻訳小説の記述の中で、特にイギリスの探偵小説を読んでいたため、正体不明の人物が「足音」を立てずに歩く場面が多いことを知っていたから。

問七　傍線部E「そこでの「気配」とは、物理的に反響する「足音」の概念とはやはり根本的に異質なものなのではないだろうか」について、なぜそのように言えるのか、理由を本文に即して説明せよ。

問八　本文の内容や表現の特徴についての説明として、適当なものを次の選択肢の中から二つ選び、記号で答えよ。解答の順序は問わない。

イ　日本とイギリスの小説の中の「足音」をめぐる表現について、具体例を挙げて比較しながらそれぞれの固有の文化習俗の特徴を明らかにしている。

ロ　日本の木造家屋の中で裸足で歩いたときの「足音」をめぐる記憶を記す際に、「ひたひた」のような「気配」を表すオノマトペを用いることで臨場感がもたらされている。

ハ　小説には読者が完全には理解できないような語彙や観念が登場するが、その後の実体験を通して言葉が意味する実物に出会うまでは、読者は十分に理解することができない。

ニ　既知の言葉ばかりで進行する小説はむしろ退屈であり、未知の語彙と出会ってその実体を掴むことができなくても、小説世界を享楽することは可能である。

ホ　西欧の風土の中から発想して使用している語彙からなる翻訳小説の世界を享楽するためには、そこに登場する文化習俗を完全に理解する必要がある。

〔三〕 次の文章は、筆者の鴨長明が、「ある人」の話を聞いたときのことを記している。読んで、あとの問いに答えよ。

ある人語りていはく、「ことの縁ありて、井手といふ所にまかりて、一宿Aつかまつりたること侍りき。所のありさま、井手川の流れたる体、心も及び侍らず。かの井手の大臣の跡なればことわりなれど、川に立ち並びたる石なども十余丁ばかり、さのみやは遠く立て置かれけむ、石ごとにただ①なほざりのこととは見えず、②わざと立てたるやうになむ侍りし。そこに古老の者の侍りしを語らひて、昔のことをたづね侍りしついでに、『井手の山吹とて名に流れたるを、いと③見え侍らぬは、いづくにあるぞ』とたづね侍りしかば、『④さること侍り。かの井手の大臣の堂は、一年焼け侍りにき。その前におびたたしく大きなる山吹、むらむら見え侍りき。その花の輪は小土器の大きさにて、幾重ともなく重なりてなむB侍りし。それをさやうに申し置きて侍るにや。また、かの井手川の汀につきて隙もなく侍りしかば、花の盛りには黄金の堤などを築き渡したらむやうにて、他所にはすぐれてなむ侍りし。されば、いづれを申しけるにか、今分きがたく侍り。ただし、下郎の言ふかひなく侍ることは、かく名高き草とてところもおき侍らず、田作るには、草を刈り入れたるがよくいでくると申して、何ともなく刈り取り侍りしほどに、今は跡もなくなりて侍る。

それにとりて、⑤井手のかはづと申すことこそ、やうあることにて侍れ。世の人の思ひて侍るは、ただ蛙をば皆かはづといふぞと思ひて侍るめり。それも違ひ侍らず。されど、かはづと申す蛙は、他にはさらに侍らず、ただこの井手川にのみ侍るなり。色黒きやうにて、いと大きにもあらず。世の常の蛙のやうにあらはに跳り歩くことなどもいと侍らず。常には水にのみ棲みて、夜ふくるほどにかれが鳴きたるは、いみじく心澄み、ものあはれなる声にてなむ侍る。春夏の頃、かならずCおはして聞き給へ』と申し侍りしかど、その後とかくまぎれて、いまだたづね侍らず」となむ語り侍りし。

このこと心にしみて、⑥いみじく覚え侍りしかど、かひなくて三年にはなり侍りぬ。また年たけては歩びかなはずして、思ひながらいまだかの声を聞かず。かの登蓮が雨もよに急ぎ出でけむには、⑦たとしへなくなむ。これを思ふに、今より末ざまの人は、

たとひ⑧おのづからことのたよりありてかしこに行き臨みたりとも、心とどめて聞かむと思へる人も少なかるべし。人の数寄（すき）と情とは年月に添へて衰へゆくゆゑなり。

（『無名抄』より。設問の都合で本文の一部を改変している。）

（注）○井手……京都府にある地名。歌枕。○井手の大臣……橘諸兄（たちばなのもろえ）。奈良時代の貴族で歌人。○十余丁……長さの単位で一丁は約一〇九メートル。丁は町とも書く。○名に流れたるを……有名なのに。○小土器……小さい盃。○汀……水ぎわ。○かはづ……蛙の一種、カジカガエル。○登蓮……平安時代の僧で歌人。○雨もよに……雨がひどく降っている間に。登蓮は「ますほのすすき」の意味を教えてもらうために、雨の中を出かけていったとされる。○数寄……風雅なことに心を寄せること。

問一　傍線部①「なほざり」、⑦「たとしへなく」、⑧「おのづから」の本文中における意味を答えよ。

問二　波線部A「つかまつり」、B「侍り」、C「おはし」の敬語について、次のⅠ、Ⅱの問いに答えよ。

Ⅰ　誰から誰への敬意を表すか、次の中から選んで答えよ。

ある人　　古老　　井手の大臣　　下郎　　世の人　　筆者

Ⅱ　敬語の種類は何か、次の中から選んで記号で答えよ。

ア　尊敬語　　イ　謙譲語　　ウ　丁寧語

問三　点線部「隙もなく侍りしかば」を、例にならって品詞分解し、文法的に説明せよ。

（例）　　玉　／　ぞ　／　　散り　　／　　ける

（文法的説明）　名詞　　係助詞　　動詞・四段・連用形　　助動詞・過去・連体形

問四　傍線部②「わざと立てたるやうになむ侍りし」、④「さること侍り」、⑥「いみじく覚え侍りしかど」を現代語訳せよ。

問五　傍線部③「見え侍らぬ」のはなぜか。その理由を簡単に説明せよ。

問六　傍線部⑤「井手のかはづ」の話を聞いた筆者の、その後の対応が記されている部分を三十字で抜き出し、始めと終わりの五字を答えよ（句読点も一字とする）。

問七　本文の内容について説明したもののうち、最も適切なものを、次の選択肢の中から一つ選び、記号で答えよ。

ア　井手の地に泊まった「ある人」は、土地の様子や井出川の流れるさまなど、山吹以外のものを見てもあまり心を動かされなかった。

イ　「井手の山吹」は、小さい盃ほどの大きさの山吹の花が群生して堤が一面黄金色に見えたことで、かねてから世間に知られていた。

ウ　世間の人は、蛙はすべて「かはづ」と呼ぶものと思い込んでいたが、「井手のかはづ」だけは別のものだと、分けて考えていた。

エ　「井手のかはづ」は、さして大きくはないものの、活発に動き回って、夜ふけに良い声で鳴くことから、人々に珍重されていた。

オ　筆者は、「今より末ざまの人」が井手に行く機会があっても、「かはづ」の声をあえて聞こうとする者は少ないだろうと思った。

〔四〕 次の文章（【甲】・【乙】）は北宋の儒学者程頤が門人を前にして「真知」について語った二つの記録である。これらの文章を読んであとの問いに答えよ。

【甲】 ①真知与常知異。嘗見一田夫、㋑曾被虎傷。有人説虎傷人、衆莫不驚。独田夫色動異於衆。②若虎能傷人、雖三尺童子、莫不知之。然未嘗真知。真知須如田夫乃是。故人知不善、而猶為不善、是亦未嘗真知。若真知、決不為矣。

【乙】 学者固当a勉強。然不致知、怎生行得。③勉強行者、安能持久。除非燭理明、自然楽循理。性本善、循理而行、是順理事、本亦不難。但為人不知、旋安排著、便道b難也。知有多少般数、煞有深浅。向c親見

一人曾為虎所傷、因言及虎、神色便変。傍有数人、見佗説虎、非不知虎之猛可畏。然不如佗説了有畏懼之色。蓋真知虎者也。学者深知亦如此。

且如膾炙、貴公子与野人莫不皆知其美。然貴人聞著、便有欲嗜膾炙之色、野人則不然。学者須是真知。纔知得是、便泰然行将去也。某年二十時、解釈経義、与今無異。然思今日覚得意味与少時自別。

（『河南程氏遺書』巻二上、及び巻十八による。設問の都合により、返り点・送りがなを省略している部分がある。）

（注）○怎生……どうして～なことがあろうか。　○行……人間として善く生きるための道徳を実践すること。　○除非……ただ～こそ。　○理……道理。人間にとっての善なることわり。　○性……生まれながらにそなわった人間の本性。　○旋……むやみに。　○安排著……「安排」は作為を加えること。「著」は動作の完成を表す助字。後に出てくる「聞著」の「著」も同様。　○多少般数……多くの様態。種々のあり方。　○煞……はなはだしく。　○神色……顔色。態度。　○佗……三人称を表す。　○且如……たとえば。　○膾炙……「膾」はなます。「炙」はあぶり肉。おいしい料理の代表。　○野人……一般庶民。「貴人」に対して言う。　○纔……～さえすれば。～するや否や。　○行将去……現実の場で行動にうつす。実際に行ってみる。　○某……一人称を表す。　○経義……経典に書かれた聖賢の教えの内容。

問一　二重傍線部a～dのよみを送りがなも含めてすべてひらがなで記せ。

問二　傍線部①「真知」とほぼ同じ意味で使われている語を、次の(1)～(5)の中から選んで記号で答えよ。

(1) 常知　(2) 不知　(3) 致知　(4) 安排　(5) 解釈

問三　点線部㋑・㋺はどちらも同じ意味である。それぞれについて、返り点にしたがって書き下し文にせよ。

問四　傍線部②を現代日本語で解釈せよ。

問五　傍線部③について、「勉強行者」の説明として最も適切なものを、次の(1)～(5)の中から選んで記号で答えよ。

(1) 生まれながら自然に行う者
(2) 楽しく学習しながら行う者
(3) 苦心して努め励んで行う者
(4) 利益を追求しながら行う者
(5) 失敗を恐れて慎重に行う者

問六　傍線部④を返り点にしたがって書き下し文にせよ。

問七　傍線部⑤のように述べる理由について、簡潔に説明せよ。

問八　傍線部⑥のように述べる理由について、次の(1)～(4)の中から最も適切なものを選んで記号で答えよ。

(1)　古(いにしえ)の聖賢が語った猛虎の恐ろしさを、若いときには知識として何となくわかっていたつもりであったが、様々な人生経験を積んだことにより、虎の習性を詳細に研究してその獰猛(どうもう)さを深く理解できるようになったから。

(2)　古の聖賢が語った道徳の内容について、若いときには言葉として頭では理解していたつもりであったが、様々な人生経験を積んだことにより、聖賢が説いた教えの意味を真に理解することができるようになったから。

(3)　古の聖賢が語った教えの意味について、若いときには野人のような解釈しかできなかったが、様々な人生経験を積んだことにより、聖賢の境地を超越した学者にふさわしい水準の解釈を自然に語れるようになったから。

(4)　古の聖賢が語った教義について、よくわからずに勉強していた頃の理解は理にしたがうだけであったが、様々な人生経験を積んで二十歳になって以降、その教義が道徳的になぜ重要か真に理解できるようになったから。

問九　波線部ⓐ「膾炙」の語を用いた次の故事成語を完成させるのに必要な漢字二字の熟語を答えよ。

□□に膾炙する